

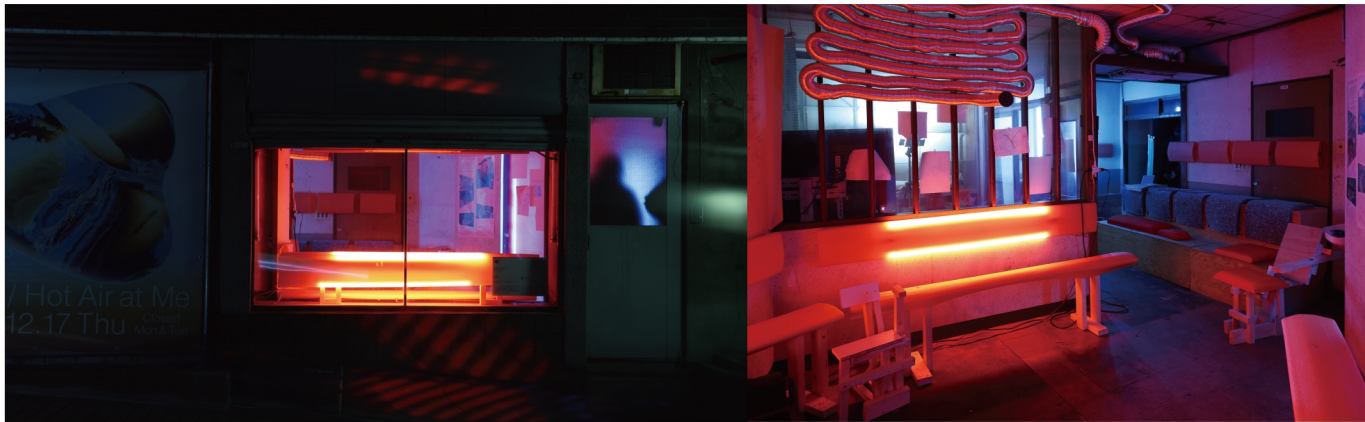
研究区分： E 研究集会の開催
研究期間： 2023 年 9 月 25 日～2024 年 1 月 9 日

研究課題名（和文） 文化人類学的デザインを枠組みとした現代アートの展示設計実践：
Artists-Run-Residence 『6okken』 との参加型リサーチを通じて
研究課題名（英文） Exhibition Design Practice in Contemporary Art Framed by Cultural
Anthropological Design: Through Participatory Research with the
Artists-Run-Residence '6okken'

研究代表者： 小川楽生 OGAWA Rakuki
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士 1 年
指導教員： 協田玲
参加者： 永田一樹（環 4）、柴原佳範（環 3）、菊田有祐（環 3）

人類学における存在論的転回を採用した、複数化した主体性概念の相互触発としてのキュレーション概念における〈触発〉をめぐって

研究分野： 人文学・芸術理論
キーワード： 現代アートのキュレーション、参加型アート、文化人類学、存在論的転回、相互触発



研究成果概要（和文）

本研究では、「現代アートのキュレーション」に焦点を当てた展示プロジェクトを実施した。本展示は、国内最大級規模のアーティストイベントである「ATAMI ART GRANT 2023」において開催され、Artists-Run-Residence 活動体「6okken」との協働によって実現された。展示には Rudi van Delden（オランダ、ハーグ王立アカデミー／Gerrit Rietveld Academie）、田中小太郎（日本、東京藝大）の 2 名を招聘した（画像上）。来場者数は 1110 人を記録した（会場である尾崎ランドビルのみ集計。全体来場者数ではない）。また、李静文（東京藝大 GA 博士課程）と、一ノ瀬龍星（静岡文化芸術大学学部生）とのトークイベントを実施し、キュレーションの力能について検討した。

研究成果概要（英文）

In this research, we conducted an exhibition project with a focus on 'Curating Contemporary Art.' The exhibition took place at the 'ATAMI ART GRANT 2023,' one of the largest art events in the country, and was realized through collaboration with the Artists-Run-Residence initiative '6okken.' We invited two artists, Rudi van Delden (Netherlands, Royal Academy of Art, The Hague / Gerrit Rietveld Academie) and Kotaro Tanaka (Japan, Tokyo University of the Arts), for the exhibition (see image above). The number of visitors recorded was 1110 (counted only at the Ozaki Land Building, the venue, not the overall number of visitors). Additionally, we conducted a talk event with Li Jingwen (Ph.D Program at Tokyo University of the Arts Graduate School) and Ryusei Ichinose (undergraduate student at Shizuoka University of Art and Culture), discussing the curatorial power.

研究背景

日本語圏での「キュレーション [curation]」には適切な訳語が存在するとは言えず、かろうじて「学芸員 [curator] の業務」といった概念が充当されている。また、学芸員の職能を規定している現行の博物館法上の「保管・収集・調査研究・展示」といった枠組みでは、本質的なキュレーション：相互触発は捕捉できない。本研究で扱う「キュレーション」概念は、〈私（ら）の生を試行錯誤させる装置＝実験場〉（山本, 2023, pp. 31-32）での〈アーティストら／会場それ自体／さまざまなアクターらのあいだ〉で交わされる主体性の相互触発の形象化／展示化である。

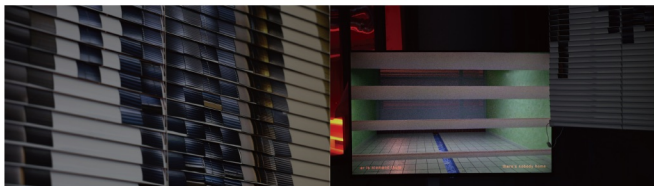
キュレーションにおける困難さを検討するうえで、【①制度的な理解／支援の不足、②複雑な存在論の交差点、③芸術的な立場ゆえの流動性、④触発の暴力性】のうち、とくに②と④に焦点を当てた。ここで、テキスト論や現代文学論で指摘される〈読者・作者・批評家〉の関係性（ド・マン, 2017）を応用することで分析可能な視点に加えて、人類学における存在論的転回（Ontological Turn; Hanare, et al., 2007: 以降 OT）を流し込む。

以上の背景をもとに、学部生／『6okken』との協働を通じて、キュラトリアルな実践を行い、再帰的反省を試みた。

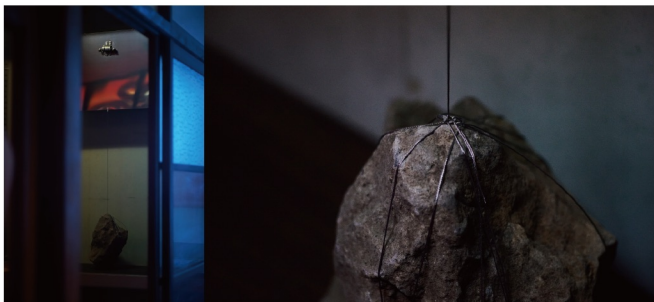
展示概要

照明環境／動線設計は太田宗宏・DODI™によってデザインされた。動線設計にあたっては、単に作品にとって理想的な環境を探るのみならず、会場そのものからの要請（天井木材の強度、音響反響、ケーブル類の配線など）をもとに組み立てられた。単に作品論・美学論だけでなく、物質それ自体の声を聞きながらキュレーションがなされる。これはキュラトリアルな実践に OT を採用する事由でもある。

Rudi van Delden の作品は自動開閉するブラインド（画像下）とモニター上映の映像作品から構成されており、1950～60年代のオランダ国内における住宅環境デザインのリサーチから導出された、女性性の抑圧に及ぼした影響を作品として顕在化させている。本作の設置にあたっては、作者がオランダ在住のため、キュレーター（本研究代表者）との 30 回以上にわたるメール往復書簡を通じてキュレーションがなされた。



田中小太郎による滞在制作と音響インスタレーションでは、これまで田中が試みてきた〈物質の内部で生まれる残響音から、物質の記憶を聴く〉音響作品を展開させながら、熱海という土地性をはらんだ作品制作を要求した。



存在論的転回：理論的背景

「フィールドの現実を前にして、自身が当然視してきた前提が挑戦を受け、あらたな世界認識に至る（…）既知が相対化されていく」人類学的過程（鈴木, 2019）における、研究者自身の文化や知識の限界といったアポリアを外すために、OT では、思考する／される対象を人ととどめない。ここで行われる西洋的存在論の相対化と、フィールドの人々の思考や概念をもってラディカルな他者性を引き出し、新しい概念を再構成することが任務となるが、このとき「認識」と「事物」の境界線は消失する（cf. 相原, 2017）。「存在の捉え方を再帰的な反省へと開きつづける方法論的立場（Holbraad & Pedersen, 2017, p. 11; 鈴木, 2019, p. 97）」において、研究者は当事者となることのみならず、alternative ontology（＝別様の存在論; Holbraad & Pedersen, 2017）を探る立場を採用。OT をキュレーションに適用することで、作品論に完結しない複雑な主体性の関わり合いを想定し、複数の存在論を採用しながら、ものそれ自体の声や反響を包含した相互触発こそを、ひとつの定位とすることが可能になる。

どのように、触発されるべきか？ だれが、触発するのか？

——キュレーターとは、もはやアーティストと公衆の間を取り持つ媒介者という、美術館モデルに留まる存在ではなくなった。そうではなく、キュレーターとは、幅広い鑑賞者の層にとって社会的意義のある芸術を、協働して生産＝創造することを確固として望み、展覧会そのものを包括的な議論とみなす人々である。（Smith, 1993; ビショップ, 2016, p. 309）

キュレーターは作者にもなりきれず、鑑賞者にもなりきれない、多重の〈し損ない〉で傷を受け、回復するものである。キュラトリアルな試行における〈(OT を採用した) 物質からの触発／作者からの触発／自己自身にあつての・自己自身とともにある、触発〉にある〈触〉はしかし、暴力であつてはならない。デリダ的に「代わりつつ起こる」触発は、「構造的に開かれていない」「戦場」において、たしかに傷を受けながら慰める「別の規定の不安げな喧騒、別の決断の経験、別の思考の身振りである」（デリダ, 2006, pp. 412-420）。

キュラトリアルな相互触発は、つねに別の〈触〉を考へることであり、芸術的に複数化した主体性へとひらかれている。

詩的に、アーカイブすること：今後の展望

キュラトリアルな試みは別様の主体性へとひらかれるべきであり、従ってそのアーカイブもまた、別様の言語／経験／読みへとひらかれる必要がある。それは詩的なアーカイブをさぐる試みであり、ニューメディアを詩的に翻訳しなおす試みでもある。OT を採用したキュラトリアルな方法論を探ることにより、理論の境界線を超越した、〈私（ら）の生を試行錯誤させる装置＝実験場〉での〈別の触発〉を考へることができる。今後の研究でより精密な理論化をはかることとしたい。

引用文献

- ▷相原健志 (2017) 「人類学存在論的転回における概念創造という方法の条件と問題——創造から他律的変容へ」『慶應義塾大学日吉紀要』(49), pp. 1-15.
- ▷小川楽生 (2022) 「SNS が書き換えた想像と信頼：半透明なエクリチュールが〈多〉-接続詞化した『曖昧さ』について」『Keio SFC Journal』(22) 2, pp. 348-376.
- ▷J. デリダ, 松葉祥一訳 (2006) 『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』青土社.
- ▷山本浩貴 (2023) 『言語表現を酷使する (ための) レイアウト——或るワークショップの記録 第 0 部 生にとって言語表現とはなにか』いぬのせなか座.
- ▷Bishop, Claire. "Havana Diary: Arte de Conducta," Untitled 45, Spring 2008, Arts Council, England, 2008. (illust.) pp. 38-43.
- ▷Smith, Valerie. (1993) "Ghent: Snoeck Ducaju and Zoon", in Sonsbeek 93, p. 35.
- ▷Hanare, A., Holbraad, M., & Westell, S. (2007) "Introduction: thinking through things." In Hanare, A., Holbraad, M., & Westell, S. (eds.) Thinking through Things: Theorising artefacts ethnographically. London: Routledge, pp. 1-31. また、次も参照のこと. Holbraad, M. & Pedersen, M. (2017) The Ontological Turn: An Anthropological Exposition. Cambridge University Press.